

院長ノート

とは

病院のホームページに掲載している畑山院長のエッセイです。
月に1回くらい、脳外科診療や日常生活で感じている想いを
軽妙なタッチで書き連ねています。
ご興味ありましたらQRコードから過去の内容もご覧下さい。



脳神経外科医
畑山 徹
(はたやま とおる)

1963年生まれ

青森で育ち、弘前大学を1988年に卒業
日立市の病院で河野拓司理事長に手術の
手ほどきを受け、東北各地で腕を磨いた
のち、2013年から当院に勤務
アメリカで三叉神経痛と顔面痙攣の治療
を学び、国内でも有数の実績を持つ
趣味は我流のピアノ
たまにライブハウスで演奏

vol. 52

はた流コミュ術

第2条「目を見せる」

前回スタートした新連載「はた流コミュ術10か条」。
第2条は「目を見せる」です。

初対面の相手に、まず寄り添う気持ちを伝えたくても、マスク越しだと目でしか表情を示せません。
それでも「口ほどに物を言う」だけあって、目は「見る」だけでなく「見せる」ことでも力を発揮してくれます。
どうせ見せるなら、片目だけでなく、両目一緒の方が目元の様子も伝えやすいでしょう。
そのために効果的な方法は、相手の目を見ちゃうことです。

そんなの当たり前？、ですが言うほど簡単じゃありません。
特に男性は、照れくさくなると相手から目をそらしがちです。そんな時は、
相手の眉間を見ていれば「目を見せる」というコミュ術第2条の目的は果た
せます。

診察でも、カルテの入力に没頭していると。いつの間にか目を合わせる時
間が減っています。せめて「今日はどうしました？」と聞く時には、しっか
り両目を見せて思いやりを示さないと、相手が戸惑うかもしれません。
もう一つ、当院でもオンライン診察を始めましたが。パソコン画面で相手
の目を見てみると、向こうには視線がズレて映ります。少しやりにくいん
ですが、自分を映すカメラを時々見てあげると、相手は目が合ったように
感じます(Amazonで見つけた小型カメラは、画面に映る相手の目の位置に
セットできるので便利です)。

そういうわけで、目を見せるとコミュニケーションも「開眼」できると期待
していますが、同じ「目」でも、それぞれ痛かったり被害を受けたりするので、
できれば見たくない目が二つありますよね。
足の魚の…、そして台風の…ですが…

次回、第三条は「うまく微笑む」です！



院長ノートはこちらから→
<https://mito-bhc.com/blog/blog.html>

